

トロピカルアイランドを奪還
せよ！

四神 夏菊

出会い

AM7：00、マリンコースト上空

バサッ・・・バサッ・・・

朝方のマリンコースト上空。

段々と空が明るくなる明け方の頃。

その海の上には1つの影が、別の島を求めて飛んでいた。

「・・・ふう、朝のうちに島を出ることになっちゃったな。ま、太陽が出て来る瞬間を見るのが、俺の楽しみの1つだからいいけどな。」

空を飛ぶ影が別の島を求めて飛んでいると、海から太陽が顔を出した。

太陽が出てくると、その光に照らされ、空を飛ぶ影の色が見え始めた。

その影は、大きな赤い翼を広げた緑色のボディに、青い髪の龍だった。

『とりあえず、どこかよさそうな島、無いかな・・・』

夜明けの瞬間を見つつ、龍が海を飛ぶことおよそ30分・・・

前方に、島が見えてきた。

『ん？ あれは、島か？ 意外だな、30分ぐらいで別の島を見つけられるなんて。いつもなら1時間はかかるんだが・・・ま、早くつけば、その島を少々散策が出来るからいいけどな。』

龍はそう思いつつ、その島に向けて飛んでいった。

その島は、自然が広がる少し大きめの島だった。

AM7：25、ミスティックルーイン

龍が向かって行った島にある地域『ミスティックルーイン』

ミスティックルーインのとある工房内で、設計図を描いている一人の人影があった。

「うーん、これで大丈夫かな・・・　ここがこうなって、こうなるから・・・　うん、いいかな。」

机の前に立ち、広げられた方眼紙に設計図を書いていたのは、1人の子狐だ。

この子狐の名前は『マイルス・パワー』ことテイルス。

テイルスは1人、新しく作るメカのために設計図を、1人淡々と書いていた。

すると、

ガチャッ

不意にテイルスの後方から扉が開く音がした。

工房の入り口が開き、やってきたのは青いハリネズミだった。

「よお、テイルス、調子はどうだ？」

「あ、ソニック、いらっしゃい！」

テイルスは名前を呼ばれ振り向き、立っていた存在の名前を呼んだ。

彼の名前は『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』

音速の名を持つ、とても足の速いハリネズミだ。

「今、設計図が出来てひと段落したとこだよ。」

ソニックがテイルスのそばへと歩み寄る中、テイルスは先ほどまで行っていた作業内容を話した。

「そうか、ならちょうどいいかな。」

「？」

作業内容を聞いたソニックはそう言った。

「さっき、風が気持ちいい場所を見つけたんだ。　自然も豊かだし綺麗な所だぜ。　テイルスがそろそろ設計図が出来てる頃だと思って来たんだ。　よかったらこないか？」

ソニックは1段落したと思われるテイルスに対し、提案を出した。

「うん、僕も行ってみたいな。 外に出ようと思ってたから、いいかな？」
テイルスはソニックからの提案を受け入れ、OKを出した。
「もちろんだぜ。 じゃ、すぐに行こうぜ。」
「うん。」

テイルスはそう言うと、広げていた方眼紙を丸めて片付けた。
その後ソニックとテイルスは、ソニックのつけた場所へ向けて出発した。

AM7：35、ミドルガーデン

「ソニック～ 待ってよー」

とある場所へと向かって進んでいるソニックとテイルス。
テイルスは自分の前方を走っているソニックに対して声をかけた。

「テイルス、遅いぞ。」
「僕が遅いんじゃないかって、ソニックが早いんだよー」

数メートル先の場所で立ち止まったソニックは、テイルスを見つつ言った。
テイルスはその言葉を聞いて、軽く訂正した。

「まあ、そう言うなって。 ついたぜ。」
「うわー、凄ーい！」

そんないつもの会話をしていると、2人は目的地へと到着した。
そこは一面が草原で覆われ、海が見わたせる場所『ミドルガーデン』だった。

「どうだ、すごい所だろ？」
「うん。 とってもきれいな所だねー 風も気持ちいいー」

ソニックにそう言われ、テイルスも賛同した。
ミドルガーデンに吹いている心地よい風に、テイルスは前髪を揺らしていた。

「花の香もいいし、海も見えるし。 最高だな。」

ソニックはそう言いつつ、足元に生えていた花を見た。
小さな花々が元気に咲いており、庭園といえるような風景を出していた。
ここでのんびりしていたら、時間が過ぎるのを忘れてしまいそうだ。

「・・・あれ？ ソニック、あそこに誰がいるよ？」

ミドルガーデンでの一時を送っていると、不意にテイルスは何かを見つけ、ソニックに言った。

「？ 本当だ、ドラゴン？」

ソニックはテイルスの見る方向を見て、不思議そうに言った。
庭園の崖付近に立っていたのは、赤い翼に青い髪、緑色のボディの龍と思われる存在だった。

「あの・・・ そこの方？」

テイルスは少し遠慮がちにその場を歩き出し、そこにいた人物へ声をかけた。

「おや、ここの島の住人か。 初めまして。」

崖付近に立っていた龍はテイルスに声をかけられ、こちらに振り返り、丁寧な受け答えで挨拶をした。

そこにいたのは、龍独特の整った顔立ちに茶色の角。 綺麗なイエローアイをした男性龍だった。
。

「こんにちは。 あの、あなたは？」

「おっと、名前をまだ言ってなかったな。 俺の名前はストレンジャー ストレンジャー・ザ・ドラゴンだ、よろしく。」

テイルスに問いかけられ、龍は名前を名乗った。

「俺の名前はソニック ソニック・ザ・ヘッジホッグだ」

「僕はマイルス・パウアー 皆からはテイルスって呼ばれてるんだ。 よろしくね、ストレ

ンジャー」

「よろしくな、テイルス。」

2人からも自己紹介をされ、龍はそう言った。
そこにいたのは、ストレンジャーと名乗る龍だった。

「ところでストレンジャー ストレンジャーはどうしてここにいたの？」

自己紹介を終えた後、3人は庭園の芝生の上に腰を下ろし、話をしていた。
テイルスは気になっていた事を、ストレンジャーに問いかけた。

「俺は元々、別の島にいた住人だったんだ。 ある日その島が何者かに襲われて、俺だけの力じゃどうにもならないと思って別の島に移ってきたんだ。」

庭園の風に吹かれつつ、ストレンジャーはそう言った。
その表情は、少し暗そうだった。

「その何者かって、どんなのだったんだ？」

話を聞いて、ソニックは問いかけた。

「へんな丸いメカに乗った、ハゲオヤジだったな。」

ストレンジャーはやってきた人物を思い出しつつ、そう言った。

「Drエッグマン！」

「まーたあいつの仕業か・・・ まったく、懲りないやつめ。」

テイルスがいつもの事ながら驚く中、ソニックは表情を変えつつそう言った。

「島から逃げるなんて、俺も駄目だな。 情けない。」

2人がイラつく中、ストレンジャーは悔しそうにそう言いつつ、視線を逸らした。

「ううん、ストレンジャーは悪くないよ。 悪いのはエッグマンだよ。」
「ありがとう、テイルス。」

少々落ち込むストレンジャーに対して、テイルスはそう言い、慰めた。

「よかったら、俺もあいつの駆除に手伝わせてもらえないか？」

2人のやり取りを見て、ソニックはストレンジャーに提案を出した。

「いいのか？ ソニック。」

「なあに、そのぐらい別にいいさ。 なあ、テイルス。」

「うん。 僕も手伝うよ。」

ストレンジャーはソニックの言った事に対して聞き返すと、ソニックとテイルスは口を揃える様に言った。

「ありがとう、2人とも。」

2人が言った事に対して、ストレンジャーは感謝をしつつ言った。

「今日はまだ日が高いけど。 この島で休んで、明日その島に行こうよ。」

「そうだな。 ほかに俺の仲間がいるから、そいつらにもオマエのことを紹介するぜ。」

ソニックとテイルスはこの後の行動を考え、ストレンジャーに提案した。

「ありがたいよソニック。 まだこの島に来たばかりだから、一通りこの島も見ておきたかったんだ。 いいか？」

自分が考えていた事を提案され、ストレンジャーは少し嬉しそうにそう言った。

「いいぜ！」

「もちろん！」

「ありがとう。」

2人の意見を聞き、ストレンジャーは今後の行動を共にする事にした。

「そうと決まれば、早速ナックルズ達に会いに行こうぜ。」

「うん。 行こう！ ストレンジャー」

「おう。」

話をしているうちに打ち解けた3人は、ほかの住人達の所へ行くことになった。

— 続く —

空中の島

AM8:00、グリーンフォレスト

ミンミンミン、ジジジジジジ・・・・

ガサガサッ・・・・

ミドルガーデンでのやり取りの後。

ソニック達は、ナックルズのいるエンジェルアイランドを目指して、森を進んでいた。

「虫がすごい鳴いてるな。」

「夏だからかなー」

先導を歩くソニックが言った言葉に対して、テイルスは相槌を打つ様に言った。

「それにしても、ここはジャングルか？　すごいツタや植物が生い茂ってるが・・・」

ストレンジャーは、森のあらゆる所から出ているツタや植物の葉を退かしつつ、ソニック達に問いかけた。

「まあ、一様森だけだな。　ジャングルっぽいけど。」

「ところでソニック、これからどこに向かっているんだ？」

まだ目的地を知らないストレンジャーは、先頭にいるソニックへ問いかけた。

「とりあえずナックルズのところへ向かっているけど、迷いそうだぜ。」

「エンジェルアイランドだね。　ナックルズ、居るかなー？」

ソニックの言った言葉に対して、テイルスは目的地の名称を言った。

「天使の島？　ナックルズは天使か？」

テイルスの言った言葉を聞き、ストレンジャーはさらにソニックへ問いかけた。

「No。　ナックルズはハリモグラだぜ。」

「そのエンジェルアイランドで何をしているんだ？」

「マスターエメラルドって言う、大きな宝石を守っているんだよ。」

テイルスはソニックの代わりにストレンジャーからの質問に答えた。

「大変だな、見張りなんて。」

「ナックルズにとっては仕事みたいなもんだけどね。 ね、ソニック。」

「まあな。 . . . おっと、まいったな。 ツタが絡まっていけねーぜ。」

道を進んでいたソニック達の前に、大量のツタが道を塞いでいた。

そのためソニック達は、ツタの前で一時停止となった。

「まいったな、この道でいつも行っていたからな。」

ソニックは目の前にあるツタの壁に舌打ちしつつ言った。

「どうする？ ソニック。」

「回り道していくか。 テイルス、ストレンジャー。」

「ちょっと待って。」

ソニックからの提案を一時置き、ストレンジャーは絡まっているツタを観察し始めた。

「これくらいなら大丈夫だな。」

「どうしたの？」

ストレンジャーの様子を見て、テイルスは問いかけた。

「ちょっと下がっててくれ。 ソニック、テイルス。」

「う、うん。」

ストレンジャーにそう言われ、ソニック達は数歩後ろへ下がった。

「何をするんだ？」

「まあみてな、ファイヤーブレス！」

するとストレンジャーはいきなり口から炎球玉を放射した。

炎はツタに命中すると、メラメラとツタを焼いていった。

「おお、すげえな！　こんな特技があったのか。」

「まーな。」

「でも、炎じゃ森も燃えちゃうよ!？」

テイルスは燃えるツタを見つつ、ストレンジャーに言った。

「大丈夫、アクアブレス！」

ストレンジャーは、口から大量の水とシャボン玉を放射した。

そして、炎をみるみる消していった。

「どうだ、山火事にはならないぜ。」

自分が出した炎をすべて消し終わると、ストレンジャーはソニックとテイルスに言った。

「う、うん。　すごいよストレンジャー！」

「同感だ、まいったぜ。」

ストレンジャーの行動を見た後、2人は称賛の言葉を口にした。

「じゃ、先へ行こうぜ。」

「おう。」

その後3人は、焼けたツタを取り払い、島を目指して進んでいった。

AM10:00、エンジェルアイランド

長い森を抜け、ソニック達はエンジェルアイランドの前までやってきた。

「やっと森を抜けたぜ・・・」

「ふう、外が明るいね。」

「あれはなんだ？ ソニック。」

ストレンジャーは前方にある島を指差し、ソニックに問いかけた。
指差した先には、空に浮かぶ巨大な島があった。

「あれが、ナックルズの住んでるエンジェルアイランドだぜ。」

「何で浮いてるんだ？」

ストレンジャーは見たまんまの風景を、ソニック達に問いかけた。

「マスターエメラルドの力で浮いてるんだよ。」

「そのエメラルドの力はすごいな・・・」

テイルスからの回答を聞き、ストレンジャーは素直に驚いた。

「ナックルズ、いるかなー？」

「とりあえず行ってみようぜ。」

島を一通り見た後、ソニック達は走り出し、その島へと向かって行った。

数十秒ほど陸地を走り、3人は島までやってきた。

「ついでに、ここがエンジェルアイランドだ。」

島に到着したソニックは、辺りを見つつストレンジャーに言った。
そこは、緑が一面に敷き詰められたかの様な草原が広がっていた。
島の中心には、1つの祭壇があった。

「下から見た感じより、全然広いな。」

「あそこの祭壇に、ナックルズが居るはずだよ。」

ストレンジャーの様子を見ていたテイルスは、島の中心にある祭壇を指差し、教えた。

「お、いたいた。 おーい、ナックルズ。」

ソニックはナックルズの姿を確認すると、ナックルズへ声をかけた。

「ZZZZ・・・」

だがナックルズは祭壇の上で横になり、寝ている様子だった。

「・・・寝てるね。」

「コラァ！！ ナッコウズ！！」

ソニックは少々大声で再びナックルズに声をかけた。

「う、ううん？ お、ソニックか・・・ 何だ？ どうした？」

ソニックの声に反応し目を覚ましたナックルズは、半分寝ぼけつつソニックに問いかけた。

「とりあえず下りて来ーい。」

「わあったよ。」

ソニックからの催促を受け、ナックルズはいそいそと祭壇の階段をおりて行った。

彼はハリモグラのナックルズ・ザ・エキドゥナ。

ナックルズ一族の末裔であり、エンジェルアイランドに1人で住み、島にある宝石『マスターエメラルド』を守る生活をしていた。

「よお、ソニック。」

「おせーぞ、ナックルズ。」

ソニックは軽く怒りつつ、ナックルズに言った。

「寝てたんだからしかたねーだろ。」

ソニックの怒り様を見つつ、ナックルズは言った。

「今日も見張りだね。」

「まあな、これが俺の仕事だからな。」

テイルスの言った事に対して、ナックルズはそう答えた。

「そうだよな、ゴメンね。」

「気にすんな。　・・・ところで、そいつは誰だ？」

一通りの会話を済ませた後、ナックルズはストレンジャーを見つつ言った。

「あ、ストレンジャーの事？」

「ストレンジャーって言うのか、お前。」

テイルスに名前を聞き、ナックルズは再びストレンジャーを見た。

「ああ。　本名はストレンジャー・ザ・ドラゴンだ。　よろしく、ナックルズ。」

「こちらこそ、よろしくな。」

自己紹介を済ませ、2人は挨拶を交わした。

「ところで昼寝をしていたナッコウズ。　今は暇か？」

「昼寝はいいだろ・・・　まあ、暇だな。」

ナックルズは軽く付いた寝癖を直しつつ返事を返した。

「実は、ストレンジャーの居た島がエッグマンに襲われちゃったんだ。　だから、一緒に来てくれないかな？」

「島って、何処だ？」

「ここから南にある、トロピカルアイランドだ。」

ナックルズからの問いかけに、ストレンジャーは島の名前を言った。

「何！？ トロピカルアイランドだと？」

「あ、ああ・・・」

島の名前を聞き、ナックルズの態度の急変に、ストレンジャーは驚いた。
態度急変に加え、少々大声で言われたら、驚くのは普通だが。

「どうしたのナックルズ？ そのトロピカルアイランドって、どういう島なの？」

ナックルズの様子を見て、テイルスは問いかけた。

「トロピカルアイランドは、フルーツがとても美味しいって評判の島だ。 普段は海は渦潮に囲まれて、空の風の強さは風速50km/時の場所で中々外から入れない所のはずだが・・・ どうやって入ったんだ？ あのオヤジは。」

ナックルズは一通り知っている知識をソニック達に話しつつ、ストレンジャーに問いかけた。

「昨日の夜に、空からだ。」

「風は強いんじゃない。」

先ほど言った情報と類似しない言葉を聴き、ナックルズは再度問いかけた。

「あの島の上空の風は、満月の夜に近づくとつれて弱くなるんだ。 今日がその満月の日。」

「弱い時を見てきたのか。」

ストレンジャーの言った言葉を聞き、ソニックは空を見た。

空には太陽が輝いていたが、沈みかけた月も浮かんでいた。

月は満月より少し早い時を示しており、本日の夜には綺麗な姿を見れそうだった。

「じゃあ、僕らは今日の夜に、島に行けばいいんだね。」

「そういうことだな。」

「って事は、夜に出発することになるな。」

4人は大体の情報を仕入れ、出発する時間帯を決定した。

「じゃあ、作戦を立てていかないかね。」

「まずは情報収集だな。」

そして、今後の行動も同時に決定した。

「俺は1回島の様子を見てくる。どんな状態なのか見てこないとな。」

ストレンジャーは自分の行動を決め、ソニック達に言った。

「俺も行くぜストレンジャー。」

その行動に、ナックルズも賛同した。

「ああ、頼むぜ。 ナックルズ。」

「任せとけて。」

ナックルズとストレンジャーの話しはまとまり、島を見てくることになった。

「僕はメカの整備をして、その時に備えるよ。」

「じゃ、俺はテイルスの手伝いでもするかな。」

「うん。」

ソニックとテイルスは、メカの準備をする事に決まった。

「じゃあ今日の午後4時。ここに集合だな。」

「うん」

「決まりだな。」

こうして、ナックルズも島へ行ってくれることになり、4時までに準備をそれぞれすることになった。

はたして、作戦はどうなるのでしょうか。

— 続く —

作戦

PM2:00 トロピカルアイランド上空

「やっぱまだ風が強いな。 スtrenジャー、大丈夫か？」

「大丈夫だ。」

ミスティックルーインを後にしたストレンジャーとナックルズは、トロピカルアイランドの現在状況を偵察に出てきた。

時刻は昼過ぎ。 太陽の日差しが暖かい。

「けっこうメカになりつつあるな。 まいったな・・・」

ストレンジャーは今現在の島の様子を見つつ、そう呟いた。

「ああ。 でもまだ自然の部分が3/4ぐらいあるから、進行状況はいまいちみただけだな。」

「多分エッグマン達は、あの真ん中の塔にいると思う。」

ナックルズの言った事を聞きつつ、ストレンジャーは前方にそびえ立つ塔を指差した。

指差した方角には、銀に輝く塔がそびえ立っていた。

「西側からメカになりつつなってるみたいだな。」

「って事は、前に居た所はまだ大丈夫だな。」

ストレンジャーはナックルズの言った事に対して、ふとそう言った。

「もと居た所って、何処だ？」

ふとストレンジャーの呟きを耳にし、ナックルズは問いかけた。

「東側の浜辺にある、あの家だ。」

「あれか？」

ストレンジャーが指差した方向を見つつ、ナックルズは建物を確認した。

指差した方向は島の東側、砂浜の広がる海岸付近に小さめの木製の家が立っていた。

外見はシンプルな行動となっており、木造ならではの樹の色が出ていた。

「けっこう立派な家だな。 1人で造ったのか？」

発見した家の造りを見つつ、ナックルズはストレンジャーに賞賛の声をあげた。

「まあな。 あれくらいなら、なんとか造れるから。」

「そうなのか。」

ストレンジャーの言った事を聞き、ナックルズはそう言った。

「じゃあそろそろ戻ろうぜ。」

「ああ。 でもナックルズ、ちょっと重い・・・」

ストレンジャーは少々苦しそうに、ナックルズに言った。

実の所、ナックルズは空を飛んではおらず、ストレンジャーに運んでもらう形で飛んでいたのだ。

そのため、ストレンジャーは自分とナックルズの体重分を支えるべく、翼を羽ばたかせていた。

「仕方ないだろ。 俺は羽根なんか無いし、滑空は風が乱れてるからダメだしな。」

「急ごう・・・ このままじゃ、落ちる・・・」

「頑張れ、ストレンジャー」

ナックルズからの応援を聞きつつ、ストレンジャーは必死に翼を羽ばたかせ、ミスティックルーインへと戻って行った。

PM3:00 テイルスの工房

一方、こちらはソニックとテイルス。

「テイルス、どうだ？」

ソニックは設計図と睨めっこをしている、テイルスに問いかけた。
ナックルズとストレンジャーとは違い、島にあるテイルスの工房へと来ていた。
今はメカの製作途中の様だ。

「うーん、夜まではちょっと無理かな・・・」

「まいったな。」

テイルスは設計図と作業中のメカを照らし合わせつつ、ソニックに結論を述べた。
その回答を聞き、ソニックはそう言った。

「でも、何とかなるかな。」

テイルスはふとそう言うと、設計図を丸め始めた。

「どうするんだ？」

「海は僕とナックルズ、それにストレンジャーは風が無ければ飛んでいけるし。 ソニックはナックルズに乗って行けば大丈夫。」

「エッグマンのメカに会った時、テイルスはどうするんだ？」

「何か爆弾みたいのを使って、対抗しようかな。」

テイルスはそう言うと、持っていた設計図を机のそばにあるポケットの中へ入れた。
その後、テイルスはノートを取り出した。

「大丈夫か？」

「うん、これでも爆弾くらい作れるよ。」

テイルスはソニックからの問いかけに対してそう言い、ノートのとある一面を開いた。
そこにはメカとは違う物の設計図と材料、製作過程等が描かれており、爆弾製作のノートの様だった。

「気をつけろよ。」

「うん。 あ、そろそろ集合時間だよ。」

作業台に乗っている時計を見つつ、テイルスはソニックにそう言った。

「おっと、ナックルズ達はもう帰ってきたな。 行こうぜ。」

「うん。」

ソニックからの提案を聞き、テイルスはノートを閉じつつ言った。
その後2人は、集合場所のエンジェルアイランドに向かって行った。

PM4:00 エンジェルアイランド

「よう。 ソニック、テイルス。」

工房を後にしたソニックとテイルスが島に到着すると、ナックルズとストレンジャーがすでに祭壇の前に立っており、2人を待っていた。

「よかった・・・ 間に合った。」

「お疲れ、テイルス。」

少々息切れしているテイルスに、ストレンジャーはそう言った。

「よし、皆集まったな。じゃあ、作戦会議を始めるぞ。」

「OK。」

ナックルズ的一声に、ソニック達は返事をした。

「まずは俺らから報告するぞ。」

4人はエンジェルアイランドの祭壇の前に固まって座り、作戦会議を開始した。

「トロピカルアイランドは午後2時30分現在。 北側を中心として1/4近くがエッグマンの手によってメカに、残りの3/4はまだ自然のままだったぜ。」

「テイルス、メカのほうは？」

ナックルズはストレンジャーからの一通りの報告を話し終えると同時に、テイルスに問いかけた。
。

「造り途中のメカはまだ出来そうに無いんだ。 だからナックルズ、ソニックを乗せて島に行ってくれる？」

「まあ、仕方ないか。」

「頼むぜナックルズ。」

テイルスからの報告を聞き、ナックルズは了解した。

「それで、島に着いてからはどうするの？ ナックルズ。」

テイルスは少々気になっていた所をナックルズに問いかけた。

「二手に分かれて進もうと思うんだが、どうだ？」

「うん、いいね。」

ナックルズからの提案に、テイルスは賛同した。

「じゃあ俺はナックルズと、メカエリアになりつつある西側から行くぜ。」

「じゃあ、僕はストレンジャーと東側かな。」

「そうだな。」

ソニックの行った事に対してテイルスはそう言うと、ストレンジャーは相槌を打った。

「・・・でも大丈夫か？」

多少気になったのか、ナックルズはテイルスとストレンジャーに問いかけた。

「自然の方なら、抜け道も知ってるからなんとか。」

「そうじゃなくて、メカに会ったらって事。」

ストレンジャーからの意見を置き、再びナックルズは問いかけた。

「僕は爆弾で。」

「俺は属性プレスで行くぜ。」

ナックルズからの問いかけに、テイルスとストレンジャーは強気に言った。

「まあ、そう言ってんだから。 いいんじゃないか？ ナックルズ。」

「お、おう・・・」

そんな2人の言動とソニックのフォローを受け、ナックルズはちょっと心配しつつ言った。

「じゃあ決まりだね。 島での合流場所は何処にする？」

ナックルズの言った事を聞き、テイルスは次の問いかけを3人に持ちかけた。

「島の中心にエッグマンの居そうな塔があったから、そこで落ち合おう。」

「了解。」

問いかけにストレンジャーが答えると、テイルスは承諾した。

「っしゃあ。 夜までフリーだな。」

作戦会議が一通り終了すると、ナックルズはそう言った。

「俺はテイルスの工房にいるよ。 道がまだわからないから。」

「うん、わかった。」

ストレンジャーの言った事に対して、テイルスは承諾した。

「じゃ、今晚の11時な。」

「じゃあな。」

4人の話し合いは終了し、解散となった。

PM4:00 テイルスの工房

エンジェルアイランドでの会議を終え、テイルスとストレンジャーは先に工房へと向かって行った。

「そういえば爆弾を作るって言ってたな。 どのなのを作るんだ？」

工房に到着し、ストレンジャーはテイルスに問いかけた。

「そうだねー 普通のや設置型のとか、いろいろな種類を作ろうかな。」

先ほど出したノートを見つつ、テイルスは爆弾の内部構造や材料、デザインを考えつつ言った。

「でも。 爆弾は無くなったら、それで終わりだろ。」

「あ、そうだね。」

ストレンジャーからの問いかけに、テイルスは思い出したかのように言った。

「それに、そんなに持っても行けないしな。」

「そうだったね。 いつもメカだから、量とかは考えて無かったよ。」

テイルスは素直にストレンジャーからの意見を聞き入れ、笑顔で理由を言った。

「それならさ、テイルスは剣とか武器は使えるか？」

そんな無邪気なテイルスを見てふと、ストレンジャーは思いつき、テイルスに問いかけた。

「武器？ うーん、自身は無いけど・・・」

「武器でよければ、俺の家にもそういうのあるから。 それを使ったらどうだ？」

「でも、メカを切れる？」

テイルスは肝心な所が気になり、ストレンジャーに問いかけた。

「大丈夫だ。 剣の素材は水晶だが、ダイヤモンド以上の強度でなければ何でも切れるぜ。」

「水晶？　すごいねー　ストレンジャー、剣なんて作れるんだー」

テイルスはストレンジャーの事を褒めつつそう言った。

「いや、俺が作ったんじゃないんだ。　ちょっといろいろあってな。」

「そうなんだ。」

ストレンジャーはちょっと横を向きつつ言った。

「だから、爆弾は少しで大丈夫だ。」

「そうだね。　ありがとう。」

2人は仲良く、そんな会話をして過ごした。

その後テイルスは、今夜使う爆弾を作り始めた。

作戦の時間開始まで・・・

－続く－

潜入

PM7:00 トロピカルアイランド 塔最上階

開発途中のトロピカルアイランド。

島の中心にそびえ立つ、塔の最上階の展望台フロア。

そこの一室では、何処かで聞いた事のある笑い声が広がっていた。

「フォーッフォッフォ・・・」

笑っているのは、自称悪の天才科学者、Drエッグマンだ。

ずば抜けたIQを持つ、ストレンジャー曰くハゲオヤジと呼ばれる男だ。

「エッグマン様ー」

そんなエッグマンのいる部屋に入ってきたのは、その部下であるデコーとボコー似た様なデザインの、2体のメカだ。

ちなみにボディカラーは、デコーは黄色、ボコーは灰色だ。

「何じゃ。 デコー、ボコー」

そんな2体の呼び声を聞き、エッグマンは座っていた回転椅子を回し、2体の顔を見た。

「現状の進行報告に来たばい。」

デコーとボコーは計画の進行状況の書かれた紙を取り出し、書かれている内容を報告した。

「ただいまの進行状況は約40%、工事完了予定はあと3日の予定。 天気の崩れは無しだにや。」

「風はだんだん弱くなっていますので、上空から見ることも可能ですばい。」

「以上！」

進行報告を終え、2人は声を揃えて締めた。

「案外ゆっくり進行しているようじゃな。島のフルーツは、ちゃんと収穫したか？」

「はい、大体のフルーツは収穫しましたー」

「よしよし。この様子なら、誰も邪魔はせんだろ。」

エッグマンは満面の笑みを浮かべつつ、そう言った。

「エッグマン様ー ソニックは、来ないと思いますか？」

不意に、デコーはエッグマンに問いかけた。

「アイツは水が苦手じゃから来ないだろ。それに、この島のことなんて知らんに等しい。」

デコーからの問いかけに対して、エッグマンは少々考えつつ答えを述べた。

「その事なんですが・・・ エッグマン様。」

少々遠慮がちに、ボコーはエッグマンに声をかけた。

「何じゃ、」

「実は約5時間位前。この島の上空を監視していた監視カメラから、ナックルズらしき人影を発見したとの連絡が・・・」

「何じゃと！？ それは本当か？」

エッグマンはデコーの発言に、大声で言った。

「はい。もう少しで情報が来るかと。」

「どれどれ、」

エッグマンは再びイスを回転させ、窓の近くに設置していたメカで大型スクリーンを起動させた。

キーボードを叩き、お目当ての項目を探した。

カタカタカタ・・・

『最新の情報、一件。』

「これじゃな。」

探していた情報を見つけ、エッグマンはメールを開いた。

ピッ！

『上空のカメラが確認した映像を分析した結果。 ナックルズとほか一名と判明いたしました。』

』

「まずいのう・・・ ナックルズが来たと言う事は、ソニックにも伝わっていてもおかしくない・・・」

先ほどまでの嬉しそうな笑顔が急変し、少々顔色を変えつつ、エッグマンはそう言いつつ考え出した。

「どうですか？ エッグマン様。」

そんなエッグマンを見つつ、ボコーは問いかけた。

「メカの準備をしておけ。 こいつらが見に来たと言う事は、何かしにくるはずじゃ。 注意しておけ。」

しばし映像を見つつエッグマンは考え、結論を言った。

「イエッサー！」

デコーとボコーは命令を受け敬礼した後、慌しく部屋を出て行った。

2人が部屋を後にした後、エッグマンはメールに添付されていた画像を開いた。

そこには、上空から島の様子を伺っているナックルズと、ナックルズを運んでいたストレンジャーが写されていた。

「ナックルズ以外のほか1名・・・ こいつは誰じゃ？ ソニック達の仲間に縁なんていたかのう。」

エッグマンは画像に写っているストレンジャーを見つつ、そう呟いた。

PM10:50 テイルスの工房

一方その頃、
テイルスとストレンジャーは、工房内のリビングでソニック達の到着を待っていた。

「なかなか来ないな。 ソニックとナックルズ。」

リビングにある窓辺から外を見つつ、ストレンジャーはそう呟いた。
空はすでに暗くなっており、夜が始まって数時間経った頃だった。

「もうすぐ来ると思うんだけど・・・」

テイルスも同様にストレンジャーと共に外の様子を見つつ、そう言った。
すると、

ガチャッ

「よう、お前ら。」

「あ、ナックルズ！」

2人が話をしていると、工房の入り口の扉が開き、ナックルズが工房へとやってきた。

「・・・あれ？ ソニックは？」

室内に入ってきたナックルズの後方を伺いつつ、テイルスは問いかけた。

「いや、俺は一人で来たから。」

「誰か俺の名前を呼んだか？」

「あ、ソニック！」

ナックルズがそう答えるのとほぼ同時のタイミングで、ソニックがやって来た。

「これで皆そろったな。」

ソニックとナックルズが来たのを確認した後、ストレンジャーはテイルスに言った。

「じゃあ来たから爆弾もって来るね。」

「OK。」

全員揃った事を確認し、テイルスは爆弾を取りに、奥の部屋へと向かって行った。

テイルスが奥の部屋に行って1分後。

「お待たせ。」

テイルスは爆弾の入った袋を持ちつつ、ソニック達の元へと戻って来た。

「？ 爆弾それだけか？」

テイルスが持っていた爆弾袋を見つつ、ナックルズは問いかけた。

「うん、そうだよ。」

ナックルズからの問いかけに、テイルスはそう答えた。

袋はテイルスの両手に収まる位のサイズで、袋は所々凸凹しており、中に爆弾が入っている事が見て取れた。

「えっと。 普通のが3個、時限爆弾が2個に追跡タイプ。 あと氷結玉と雷華玉に、風圧玉と

水力玉。 あとチューインスプレー」

テイルスは持っていた袋に入っていた中身を机に出しつつ、ソニック達に言った。
小さな袋からは、さまざまなデザインの爆弾が大量に出てきた。

「へえ、変わったデザインだな。」

ナックルズは置かれた爆弾を手に持ち、外見を見つつそう言った。

「このチューインスプレーは、何に使うんだ？」

ソニックは爆弾と共に置かれたスプレー缶を手に持ち、テイルスに問いかけた。
缶にはスプレーノズルがついており、赤いラベルが貼られていた。

「壁や敵にくっつける時に使うんだよ。 その缶の中には、空気中に触れて一分後に燃え始める物質が入ってるんだ。 だから、着火もOKだよ。」

スプレー缶に入っている物質の説明をしつつ、テイルスは爆弾を再び袋の中へとしまった。

「爆弾は、これだけで大丈夫なのか？」

ナックルズは回収された爆弾の入った袋を見つつ、テイルスに問いかけた。

「あと、あっちの島でストレンジャーが武器を貸してくれるって。」

「武器？」

「どんなのだ？ スtrenジャー。」

テイルスの言った事にソニックとナックルズは気になり、ストレンジャーに問いかけた。

「剣や杖や槍、あとハンマーがあるぜ。」

「オマエ、使えたっけ？」

ナックルズは以前までのテイルスの行動を思い出しつつ問いかけた。

「ソニック達が来るまで、練習してたんだよ。」

「練習って？」

「素振りと構え方。」

2人からの問いかけに、テイルスはいつも通りの表情で答えた。

「・・・大丈夫なのか？ ストレンジャー。」

そんなテイルスを見て、少々心配になり、ストレンジャーに問いかけた。

「大丈夫。 自分の身ぐらい守れるよ。」

「なら、いいけどな・・・」

ストレンジャーからの回答を聞き、ソニックとナックルズは納得した様子を見せた。

「そうそう、これ。」

「何だ？」

一通りの話が済むと、テイルスは袋と共に持ってきた、数個の小型のメカを取り出した。

「トランシーバー機能付きの、トレジャースコープだよ。 ストレンジャーの案を聞いて、使えるようにしておいたんだ。」

「これでお互い連絡をとり合おうぜ。」

「なるほどな。」

ソニック達はそれぞれテイルスからスコープを受け取り、それぞれがメカを装着した。

折りたたみ式のメカのため、関節部分にさまざまな機能が搭載されていた。

耳に装着し、目元付近に装着すると、メカから液晶画面が降りてきた。

「なかなかいいな。」

ソニックはトレジャースコープを少々見つつ、テイルスに言った。

デザインはシンプルだが、多彩な機能をつけているため、使い勝手はよさそうだった。

「夜に潜入するからこれをつければ暗い所も大丈夫だし、赤外線の確認も出来るよ。」

テイルスは装着したメカをいじりつつ、メカから液晶を出しつつ言った。

「システムは豊富だよ。」

「さすがだな、テイルス。」

「えへへ。」

ソニックからそう言われ、テイルスは嬉しそうにそう言った。

「そろそろ時間だな。」

ストレンジャーは部屋にあった時計を見つつ、そう言った。

部屋の隅に置いてあった置き時計は、11時過ぎを示していた。

「おっとそうだな。」

四人はそれぞれ外へ出て行った。

「皆、いいか？」

夜空の広がる大地に立ったまま、ストレンジャーはソニック達に確認を取った。

「OK！」

「行くよー！」

「Hear we GO！」

ソニック達はそれぞれの移動手段で空へと飛び出し、トロピカルアイランドへと向かって飛んで行った。

一方その頃、エッグマンの方はというと・・・

エッグマンは1人、展望台エリアから窓越しに夜空を見ていた。
本日の空は晴天のため、とても綺麗な夜空が広がっていた。

「エッグマンさま。」

のんびり夜空を見ていると、部屋にメイドロボットがやってきた。

「何じゃ？」

「コーヒーヲ、オモチシマシタ。」

「おう、ご苦労。」

そう言われ、エッグマンはメイドロボットの持っていたボードに乗っていたコーヒーカップを受け取り、一服した。

ズズッ

「今日も格別じゃな！」

「アリガトウゴザイマス。」

エッグマンは嬉しそうに、ロボットに言った。

「デハ、シツレイイタシマス。」

「うむ。」

「エッグマン様！！！」

メイドロボットと入れ替えて、デコーとボコーがあわただしくやってきた。

「何じゃ！ 騒々しい！」

エッグマンは今までのくつろぎモードを害され、少々怒鳴るように言った。

「コーヒーを飲んでる場合じゃないです！」

「ソニック達がこっちに向かって来てるんです！」

「何じゃと！」

エッグマンは急いでコーヒーを近くの台に置き、スクリーンを立ち上げた。

すると、スクリーンにL I V E映像が映され、ソニック達が写し出された。

そこにはナックルズに運んでもらっているソニックと、自力で飛ぶテイルス、その3人の少し上空にストレンジャーが飛んでいる様子が映し出された。

「ぬお、ソニック！ おのれー、いまいますい！」

「テイルスとナックルズもいますー」

「見知らぬドラゴンもいるですたい。」

「？ 何じゃあいつは？」

エッグマンは映像に写っているストレンジャーを見つつ、そう言った。

ストレンジャーはテイルスから話しかけられ、先ほどと変わらぬ表情で受け答えをしていた。

「わかりません。 でもテイルスのメカとは違うかと思いますが・・・」

「どうしますか？ エッグマン様？」

映像を見つつ、ボコーはエッグマンに指示を仰いだ。

「こうなりゃ戦闘モードじゃ。 急いで準備をしろ！」

「イエッサー！」

デコーとボコーは急いで準備をしに、部屋を後にした。

「まったく、いつもいつも邪魔ばかりしておって・・・ そうだ！ おいデコー」

「何でしょうか？ エッグマン様。」

一旦部屋を出て行ったデコーはエッグマンの声を聞き、素早く戻ってきた。

「あいつを戦闘モードにしておけ。」

「了解！」

デコーは新たな指令を聞き、再び出て行った。

「これで、少しはいけるかのう。」

エッグマンはメカのもとに向かって行った。

一方ソニック達はというと・・・

「風は大丈夫だね。」

テイルスは辺りの風を確認しつつ、3人に言った。

「そろそろ・・・ 見えたぞ。」

ソニック達が空を飛び数十分。

前方にトロピカルアイランドが見えてきた。

光の少ない夜空に照らされているにしては、島がやけに明るかった。

「そろそろ用心した方がいいな。」

「そうだね。 じゃあ、2手に分かれようか。」

ストレンジャーからの申し出を聞き、テイルスはそう言った。

「中央で落ち合おうぜ。」

「了解。」

ソニック達は北側、テイルス達は南側に分かれて飛んで行った。

しばらく空を飛び、ソニック達は個々で地上へと降り立った。

ピピッピピッ・・・

「こちらテイルス。 ソニック応答願います。」

テイルスは付けていたトレジャースコープを起動し、ソニックと連絡を取った。

『おうテイルス。 何だ？』

「こっちは無事に着地したよ。 周りにメカの気配は無し。」

テイルスは辺りを見渡しつつ、ソニックに現在状況を報告した。

『こっちも着陸したぜ。 メカも無しだ。』

ソニックも同様に辺りを見渡し、テイルスに報告をした。

「では動き出すね。 こっちは先にストレンジャーの家に向かうから。」

『了解。 じゃあ、また。』

「OK。」

ピッ

テイルスはトレンジャースコープでの会話を終えた。

「じゃあ、行くか。」

「うん。」

2人はそう言うと、ストレンジャーの住んでいた家に向かって歩き出した。

ピッ

「じゃあ、おれらも行くぜ。」

「おう。」

ソニックは通信を終えると、北側通路の入り口に向かって進みだした。

— 続く —

PM 11 : 50 トロピカルアイランド 北側 メカエリア

トロピカルアイランドへと潜入し、奪還を試みる事となったソニック達。
テイルスとストレンジャーの班と別れ、ソニックとナックルズは北側のメカエリアから島の中央にそびえたつ塔を目指して進んでいた。

「なあ、ソニック。」

珍しく慎重に行動を取りつつあったナックルズは、前方を歩くソニックに声をかけた。

「何だ。 ナックルズ。」

「このエリアにしては、妙に静か過ぎないか？」

声をかけられ、ソニックは辺りを警戒しながら返事を返した。
彼の言う通り、今現在2人が居るメカエリアは寝静まったかのように無音だった。
普段のエッグマンの所有するテリトリーにしては、珍しい現象だった。

「確かに静か過ぎるな。」

「・・・まさか、罠か？」

「いや、まだこういう場所だからじゃないか？」

軽く周囲の音を聞きつつ彼が言うと、今現在2人が居る所に問題があるのではと問い出した。
それもそのはず、現在の2人の居場所は倉庫のように点々と置かれたガレージの裏を進んでいたのだ。
背後にはこれといった監視カメラもほとんどなく、まだ2人が何処にいるのかもわからず敵が来ないのかもしれない。

「まあ、それもあるんだろうけどさ・・・ 表も無音だぜ？」

「なーに。 そのうちお出迎えが来るさ。」

いつもの調子で話すソニックに対し、妙に落ち着かない様子のナックルズ。
だが2人がガレージの裏道を抜けたとたん、エッグマンのメカが集団で向かってくるのが見えてきた。

彼の言った通りの展開で、だいたい読めていた様子だ。

「早速、おっばじめるか！」

「here we go！」

ソニック達はその場から飛び出し、メカに向かって突撃していった。

南側 自然エリア

一方こちらは、まだエッグマンの手にはかからず自然が残っていた島の南側エリア。

ソニック達と別れたテイルス達は、ストレンジャーがつい先ほどまで住んでいた小屋に向かって、月夜が照らす砂浜を歩いていた。

「こっちは、やっぱり静かだね。」

「そうだな。」

エッグマンのメカからの襲来がほぼ無い自然エリアの砂浜を、テイルス達はのんびり進んでいた。

今は夜のため、軽い風に吹かれる葉の音と、波の音しか聞こえない。

とても平和な環境が、そこにはあった。

「だが武器を取ったら、俺達も早めに向かわないとな。」

「そうだね。 ソニック達の方が早いと思うけど、少しでも早くつくようにしないと。」

テイルスの前を歩いていたストレンジャーは、軽い相槌を打ちつつ道を案内していた。

と言っても、砂浜のため普通に前を歩いているのにも等しい。

敵からの襲来が無い分、早めに目的地に着きたいと2人は思っていた。

「・・・テイルスは、やっぱりソニック達と仲がいいんだな。」

「うん。」

ふとテイルスの楽しそうな話し方を見て、ストレンジャーはそんな事を聞いてみた。

普段から一緒に居る事が多いソニックとテイルスとの関係が、少しだけ微笑ましかったのだろう。

。

心なしか、笑顔で彼は答えていた。

「ソニックとは、どんな出会いをしたんだ？」

「昔の出来事に、終止符を付けてくれたのがソニックなんだ。」

「昔の・・・？」

なんとなくそんな事を聞きたくなったらしく、ストレンジャーは軽く彼の顔を見つつそんな事を聞いた。

表情は特に変えず、テイルスは質問に対してそう答えた。

だが質問に対する返答が返答だったため、彼は軽く驚いていた。

「うん。今は『テイルス』って呼ばれてるけど、昔はこれで苛められてたんだ。」

その後続けて、彼は理由を説明した。

元々他の存在から苛められる事の多かったテイルスにとって、それは運命の出会いでもあった。

苛められて沈んだ気持ちを、明るく未来を照らすかの様に現れたソニック。

その姿に、彼は励まされたようだ。

「・・・悪い事、聞いちゃったかな。」

だが逆に今度は聞いた方のストレンジャーが、少し申し訳なさそうにそう言った。

他人のトラウマを思い出させるような事を聞いてしまった事に対して、残念そうにしていた。

もう少し、楽しい出会い話を期待していたのだろう。

自分よりも幼い存在の話は、少し重い雰囲気になっていた。

「ううん、気にしないで。今じゃ皆と楽しくいられて、僕は嬉しいんだ。」

そんな彼を見て、テイルスは笑顔を彼に見せつつ言った。

今では全然気にしていない様子を、ストレンジャーに目いっぱい行動で示していた。

話を聞いて、暗い顔を浮かばせたくはなかったのだろう。

「・・・そうみたいだな。着いたぜ。」

軽くテイルスに励まされつつ進んでいると、ストレンジャーは目の前に見えてきた1つの小屋前で足を止めた。

そこにあったのは、周囲のヤシの木で作られた小さな家だった。

ヤシの木を1つ1つ丸太にして、1から作られているかのようなログハウス。

屋根はヤシの木の葉と板で作られており、雨からも身を守れる作りとなっていた。

「凄い・・・！ 手作りだよね？」

「ああ、全部作ったんだ。 とりあえずどうぞ。」

軽くテイルスに賞賛されつつ、ストレンジャーは家のドアノブを引き彼を家へと案内した。

中に入ってみると、小屋の中はシンプルなワンルームの家だった。

部屋には点々とテーブルや椅子が置かれ、簡単に作られたキッチンにシャワースペース。 寝所用の小さいやしの木があった。

「ストレンジャーはベットで寝ないんだね。」

部屋の奥に生えていたやしの木を見て、テイルスはそう問いかけた。

小さな家を圧縮しないヤシの木で、自然に生えつつある様子だがとても小さいものだった。

軽く葉の下には小さなヤシの実も生えており、木はそのまま生えているものようだ。

「ああ。 ベットで寝た時もあったけど、やしの木の方が寝やすいんだ。」

テイルスと話しつつ、ストレンジャーは奥に置いてあった箱へと向かっていった。

どこか宝箱と言う言葉が似合いそうな箱で、少々剥げた赤と黄色の宝箱チックな箱だった。

大きさは大体ストレンジャーよりも少し小さい程度で、蓋を開けた状態で座らなくても中身が取り出せるほどの物だった。

「これだよ、テイルス。」

しばらく箱の中をあさり、ストレンジャーは中から一本の剣を持ちだし彼に見せた。

その剣はテイルスの背丈の6割近くある少し大きめの剣で、両手で持つほどではないが片手にしてはリーチのある剣だった。

刀身はほとんど薄い空色をした水晶で出来ており、手元付近からは2つほどオシャレに水晶が飛び出していた。

グリップ部分は赤と白のしましま模様で、シンプルかつ大胆な剣だった。

「凄い・・・ 本当にクリスタルで出来てる！」

とても普通には作れそうにない代物であり、彼は手にしつつそのつくりに驚いていた。

彼の白い手袋が見えてしまうほど透けている水晶の刀身は、とても幻想的だった。
剣刃は双方にあり、どちらの手で持っても扱えそうな剣だった。

「太陽に透かすと、少し色が変わるんだ。 . . . 使えそうか？」

「ちょっと重いけど、何とか使えるかな？」

夜ではわからない変わった点を言いつつ、ストレンジャーはテイルスが使えるかどうかを確認した。

一度右手に剣を持って、彼はその場で素振りをした。

空気を軽く切るような音が少しだけ聞こえ、彼でも威力が出せそうな様子だった。

だが少し重いらしく、持ち上げて振り下ろすまでの時間が少しだけ遅かった。

「重いか。 なら . . . 」

使い勝手が悪そうな所をみて、ストレンジャーは再び箱の元へと戻り、今度は別の武器を手にして戻ってきた。

持ってきたのは、ほぼ剣と同デザインの杖だった。

こちらは先端に星形の水晶がついており、柄が長く剣よりもリーチが長そうだった。

だが切れ味はとてもじゃないが保証はできず、本当に杖として使うための代物のようだった。

「これならどうだ？」

「これも綺麗だね。 それに、剣よりも軽いよ。」

テイルスは持っていた剣をストレンジャーに一時返却し、今度は杖を手にした。

先ほどの剣よりも長さがあるものの重みは無く、一通りのデザインを見つつそう言った。

心なしか、彼が杖を持っていると可愛らしく見えた。

「これは方向は関係なく振ると、クリスタルを振った方向に飛ばすぜ。」

簡単な使い方を説明し、テイルスは上下に振り使いやすさを確認した。

剣よりも振りが早く、あまり武器に慣れていないテイルスでも使いやすそうな武器だった。

「 . . . うん、これならいいかな。」

「じゃあ、俺は剣を持ってくぜ。 行こうか。」

「うん。」

使いやすさを確認して、テイルスは納得してその武器を持っていく事を決めた。

その後テイルスは杖を、ストレンジャーは剣を持って島の中央内部へと向かって足を踏み入れて行った。

北側 メカエリア

ズーン・・・

「やっと片付いたぜ。」

「でも、歯ごたえは無かったな。」

その頃、ソニック達はというと。

先ほどであったメカの大群を、ちょうど今倒し終えた所だった。

大群で襲ってきたにも関わらず、彼らはいつも通り平然とその場に立っていた。

「先に進もうぜ。 そろそろテイルスたちも到着して進んでる頃だろうからな。」

だが足止めを食らった事には変わりはないため、ソニックはそういつつ軽くその場で駆け足をしていた。

走るのが好きな彼にとって、結構な時間を浪費したと思い、急ぎたいのかもしれない。

「せっかくだから聞いてみたらどうだ？」

そんな彼を見て、ナックルズは装着していたメカを指さしつつ言った。

こういう時の通信機である。

「そうだな。」

ピピピピッ

軽く思い出した様子で、ソニックは駆け足を止め通信機を起動させた。

すると、数秒で通信先であるテイルスが画面に映った。

「テイルス、そっちの様子はどうだ？」

「あ、ソニック。 目的地について、僕は杖。 ストレンジャーは剣を装備して塔に向かって進んでるよ。 ソニック達は？」

「こっちはメカの大群を片付けたところだ。 敵とかは居なそうか？」

「うん。 今の所、そういう感じはないよ。」

通信機越しに2人は会話し、互いの現在地と周りの状況をうかがった。

周りには敵も居ないらしく、身の危険は今の所無いようだ。

大体の状況を聞いて、ソニックは納得した様子だった。

「OK。 じゃあ、目的地で会おう。」

「了解。」

ピッ！

状況の把握が済み、ソニックはそう言った後通信を切った。

それと同時に、液晶画面は通信機の中へと戻っていった。

「よかったな、メカにまだ会ってないみたいで。」

同じ場に立ち話を聞いていたナックルズは、会話の様子を聞いてそう言った。

どちらかと言うと、彼らを心配していたのは彼の方だが、そんなそぶりはあまり見せてはいなかった。

「まあな。 でも大丈夫だろ、テイルスだっていつまでも弱いわけないんだからさ。」

「そうだな。」

彼の問いかけに、ソニックはそう言った。

長い間付き合っているからこそ、そう言えるのだろうとナックルズも納得した様子で頷いた。

その後彼らは、島の中央へと向かって進んで行った。

南側 自然エリア

「ソニックからだったな。」

「うん。」

テイルスの作ったトレジャースコープは全部会話昨日は常にONでいつでも聞けるので指定した人意外にも聞こえるのです。

「少し心配してたみたいだったな。」

「そうみたいだったね、やっぱちょっと頼りないのかな・・・」

「そんな事無いと思うぜ？」

「そうかな？」

テイルスはストレンジャーと会話をしつつ進んでいく。

「そうだよ、テイルスはソニックみたいになりたいんだろ？」

「うん。」

「だったら強くなればいじゃないか。 自分なりに。」

「？」

「テイルスにしか出来ないことでソニックに見せれば同等に慣れるんじゃないか？」

「うん、そうだよね、僕も頑張らなくっちゃ。」

テイルスは一息ついて気合を入れた。

ストレンジャーはテイルスの先に着いて島の中心へ先導して行った。

北側 メカエリア終点付近

「ふう、ようやく付いたな。」

ソニック達はテイルス達より少し早く塔の前に着いた。
ソニック達の目の前には大きな銀の塔が聳え立っていた。

「テイルス達はまだ来てないみたいだな。」

「通信機で聞いてみるか。」

ナックルズが通信機を使おうとしたが

「ナックルズ、こっち。」

ソニックがナックルズの腕をつかんで茂みの近くへ引いた。

「何だソニック？」

「あれ。」

ソニックが指したのは見張りの門番メカ。

「いたのか門番が。」

「けっこう頑丈そうだな。」

「どうする。2人で先に・・・」

「どうしたの二人とも。」

「うわ！！？」

不意にソニック達に話しかけたのはテイルスだった。

「なんだテイルスか、脅かすなよ。」

「ゴメンね、見つけたけど気付いてなかったみたいだったから。」

「何話してたんだ？」

そのすぐあとにストレンジャーが合流した。

「あの門番。けっこう頑丈そうだって話してたんだ。」

二人も門番のメカを見つけた。

「けっこう頑丈そうだね。 本拠地に近いからかな？」

「裏口は無かったからここからしか入れないぜ。」

「やるしかないな。」

「待って、これを使おうよ。」

テイルスは持ってきた爆弾を出した。

「これでメカと扉を爆破しちゃおうよ。」

「でも威力は大丈夫か？」

「大丈夫、この爆弾、普通に投げてもいいけど、火をつければ威力は3倍になるんだ。」

テイルスは爆弾を出しつつ説明した。

「火を付けたらすぐに爆破するのか？」

「ううん、導火線は10秒間火を持っててくれるからすぐじゃないよ。」

「じゃあ、早いところやろうぜ、俺が火を付けるからナックルズが投げしてくれ。」

「いいぜ、テイルス、爆弾を。」

ナックルズはテイルスから爆弾を一つもらってストレンジャーが火を付けた。

「オラ！！！」

ナックルズは爆弾を投げた。

ドッカーーーン！！！！！！

パラパラパラ

「ちょっと威力が強かったかな？」

爆弾はメカと扉を派手にぶっ壊した。

「まあ、これが3倍だからまあいいんじゃないか？」

「とりあえず潜入しようぜ。」

4人は壊れた扉から中へ潜入した。

— 続く —

決戦

AM0 : 00 トロピカルアイランド 中央塔

ソニック達は爆弾で壊した扉から中へ潜入していた。
通路には仕掛けも無く、まっすぐな道が続いていた。
ソニック達が歩いていたら不意に

「フォーッフォフオ。」

どこからとも無くエッグマンの声が通路に響き渡った。

「エッグマン！」

「どこ！？」

ソニック達は辺りを見渡した。

「バカかお前らは、後ろじゃ。」

ソニック達が歩いてきたルートの後ろにエッグマンが現れた。

「コラエッグマン！ いきなり出てくるんじゃねーよ！」

「きずかんお前らが悪いんじゃ。」

「何を！」

いきなりナックルズがエッグマンに向かってパンチをした、が

スカッ

「な！」

「何やってるんじゃナックルズ、ホログラフィーに向かって。」

エッグマンの映像はいった。

「ソニック！ またしてもわしの邪魔をしにきおって。」

「オマエが変なことをするからだろうが。」

「うるさい！ まったく・・・ おや、何じゃソニック、新しいお仲間をつれてきたんか。」

エッグマンはストレンジャーを見て言った。

「エッグマン！ この島を元に戻せ！」

「いきなり用件かい！ 普通は名乗るのが礼儀じゃろ！」

「・・・俺はストレンジャー、ストレンジャー・ザ・ドラゴンだ。」

「じゃあストレンジャーお初だな。わしは悪の天才科学者、Drエッグマンじゃ。」

「きいてねーよ。」

ソニックは言った。

「いちいちうるさいやつらじゃな。まあ、いいわい。」

「で、なんだエッグマン。」

「おおそうじゃった。ソニック！ オマエとナックルズには特別ルームを用意してやったぞ。」

「いらないお出迎えだな。」

「まあそう文句をいうな、ポチツとな。」

エッグマンの映像はボタンを押すそぶりを見せた。

すると

バカン！

ソニックとナックルズが立っていた部分の床が抜けた。

「な！ 落とし穴！」

「うわ！」

ソニックとナックルズは下へと落ちて行った。

「ソニックー！」

「フォーッフォフォ、ソニック達さえいなければお前らなんか消し炭同然じゃ！」

「何を！」

「フッ、テイルスなんかメカが無ければ何が出来るんじゃ。」

「ソニック達をどうするつもりだ！」

「特別ルームへご案内しただけじゃ。取り返したかったらワシのいるところへ来い！」

「望む所だ！」

「最下層で待っておるぞ。フォーッフォフォ。」

エッグマンは消えた。

「テイルス、行こう！」

「うん！」

テイルスとストレンジャーは先へ進みだした。

一方ソニック達は・・・

床が抜けそのまま落下していったソニック達。

数秒間おち、地面へと到着した。

「いたたた、手荒い歓迎だな。」

「まったくだぜ。」

「なんだこれは？」

ソニック達は半透明のシェルターの中に入っていた。

「ようやく来たかソニック、ナックルズ。」

「エッグマン！」

部屋の扉の向こうからエッグマンがやってきた。

「ここから出せ！」

「まあ、少しは落ち着け。それにださん。」

「へ、こんな壁ぐらい！」

ナックルズはシェルターにパンチを繰り返した、だが

ゴン！

思った以上にシェルターは硬かった。

「硬！」

「無理すんなナックルズ、手が痛むぞ。」

「ハーッハッハッハ。 どうじゃ！ ソニック&ナックルズでも壊せんシェルターの中は。拳とスピンでも破れんぞ！」

「チッ、最初から入れるつもりだったのか。」

「まあ、そういうことじゃ、お前らがいなければテイルス達なんかどうって事もないぞ！」

「くそ！」

「安心せい、ここでじきじきにやっつけるシーンを見せてやる。」

「まったく、オマエというやつは。」

「では、そろそろ準備をしてテイルスたちをやっつけるとするかのう。」

部屋の一部の床が開き、下からメカが出てきた。
エッグマンはそのメカに乗り込む。

「早くこんかのう。」
「エッグマンも甘いな、」

シェルターの中にいるソニックは言った。

「何じゃ、観客が何を言うか。」
「テイルスを甘く見てるとまたいつものようになるぞ。」
「どういうことじゃ。」
「テイルスはいつまでも弱くは無いて事だ。」
「それに、初めて手合わせをする奴もいるだろうが。」
「フン、まあいいわい。どんな奴なのか見てやるわ！」

エッグマンはソニック達をバックにテイルス達を待っていた。

しばらく待つこと数分後

ウィーン

エッグマン達のいた部屋の扉が開いた。

「待たせたな、エッグマンとやら。」

テイルスとストレンジャーが入ってきた。

「エッグマン、ソニックとナックルズを出して！」

「言われなくてもソニック達なら後ろにいるわい。」

エッグマンの乗ったロボットが横にずれた。

「テイルス！ ストレンジャー！」

「ソニック！ ナックルズ！」

「再開でいちいち騒ぐな！ ……まったく、さっさと片付けるかのう。」

エッグマンの乗ったメカが動いた。

「エッグマンなんかにやられてたまるか！ えい！」

テイルスが爆弾を投げつけた。

ボン！ モクモク……………

「ハ、ぜんぜんきかんわい。」

エッグマンのメカには傷すら付いていなかった。

「ならば。」

テイルスがバックから爆弾とチューインスプレーを取り出し、爆弾にスプレーを吹きかけた。

「えい！」

ペト

爆弾はエッグマンのメカに張り付いた。

「何じゃ、子供だましか。」

「それはどうかな？」

テイルスが言うと爆弾に火がついた。

ドカン！

「又オ！」

「これならどうだ！」

爆弾の威力が上がった分、爆発地点からは煙が多く出ていた。
だがエッグマンのメカに少し傷が付いたくらいだった。

「フン、威力は上がっているみたいじゃがぜんぜんきかんわい。このメカはダイヤモンドと同じ強度をもっておるのじゃ。蹴っても叩いてもどうにもならんわ！」

「なるほど、ダイヤモンドと同じか。」

ストレンジャーは言った。

「ならば！」

ストレンジャーは剣を片手にメカへダッシュし切りかかった。

「破！」

スパッ！

ストレンジャーが剣を振り下ろすと、メカの腕は簡単に切断されてしまった。

「何！」

「どうだ、この剣の切れ味は、ダイヤモンド以上の強度で無ければ何でも切れるんだぜ。」

「じゃあこっちも！ えい！」

テイルスが振った杖からは水晶が飛び出し、エッグマンのメカに向かっていった。

ゴコゴコ！

水晶は貫通しメカに大きな穴を開けた。

「テイルスの持っている杖も特性は同じさ。さあ、次はどうするかな。」

「何をこしゃくな！でも、ポチッとな。」

ピッ！

エッグマンがボタンを押すとメカは自己再生した。

「え！メカの穴が！」

さっきまで空いてた穴がきれいにもとどろりになっていた。

「みたか！これが新発明のロボットの特技、自己再生じゃ！どんなに穴を開けようと関係ないわ！」

「なら、また切るまで！」

ストレンジャーは走り出した。

「させるか！」

エッグマンのメカのアームが伸びストレンジャーをつかみにかかってきた。

「これくらいなら！」

ストレンジャーは横へジャンプしアームを避けた。

「かかったな！」

「な！」

避けたアームが旋回しストレンジャーを捕まえそのまま壁へと叩き付けた。

バン！

「く！」

「ストレンジャー！」

「ち、ぬけない！」

ストレンジャーはもがくがアームからは抜け出せない。

「まったく、手間をかけさせおって。」

メカの腕は切り離され、また新しい腕が出てきた。

「さて、あとはオマエだけだテイルス。」

「エッグマン！」

「テイルス！逃げろ！」

エッグマンとテイルスの距離が近づく。

「覚悟しろ！」

エッグマンの乗っているアームが伸びてきた。

「これくらいなら！」

テイルスは後ろにジャンプしてアームを避けた。

「お返し！！」

テイルスは氷結玉を出しメカの足元へ投げつけた。

ボン！

ピキピキッ

メカの足は凍った床につかまれてしまった。

「ついで！！」

今度は水力玉をメカに投げた。

メカのボディに当たった爆弾は破裂し強い水力がメカを襲った。

「ちっ！」

メカは足を固定されたままだったので足がとれボディだけ飛ばされていった。

「お次は、」

「かかったなテイルス。」

「え？」

取れたメカの足は破裂し、テイルスは吹き飛ばされていった。

「うわっ！」

ドンッ

テイルスはそのまま壁へぶつかった。

「いたたた。」

「さて、そろそろフィニッシュと行こうかテイルス。」

「エッグマン！」

メカに乗ったエッグマンは新たに出てきた足で歩いて向かってきた。

「覚悟！」

アームがテイルスに向かって伸びようとしていた、が

「よそ見してると痛い目にあうぜ！」

エッグマンの後ろから声がした。

「何！」

「ストレンジャー！」

操縦しているエッグマンの後ろにはストレンジャーが飛んでいた。

「オマエ！いつのまに！」

「あんな腕くらい、剣があれば一刀両断だぜ？おっさんよ。」

ストレンジャーは持っていた剣をエッグマンに向けて言った。

「ち、目を離した隙にか。だがもう一回捕まえるまで！」

メカのアームがストレンジャーに向かってきた。

「あんたには学習能力が無いのか？ 破！」

ストレンジャーがその場で回転しその反動でメカのアームを切った。

「ち、ならば！」

「おっとそうはさせないよ！えい！」

体制を立て直したテイルスが水晶でエッグマンに攻撃した。

シュ！

「危ないな！ ああ！ ワシのヒゲが！」

エッグマンのヒゲは左の大半が切れていた。

「おのれ！ こしゃくな二人じゃ！」

「そろそろ終わりにさせてもらうぜ。」

ストレンジャーがテイルスの横に降り立った。

「何を！」

「テイルス！ スtrenジャー！」

「やっちまえ！」

ソニック達も応援していた。

「テイルス！ 水晶をエッグマンに向けて放て！」

「うん！、えい！」

「サンダーブレス！」

テイルスの放った水晶がストレンジャーの出したブレスと合体した。

「な、なにに！」

「いっけー！」

電気と合体した水晶はエッグマンのメカに突き刺さった。

グサッ

ドッカーン！！！！

「のわー！」

エッグマンの乗っていたメカが破壊し、飛ばされたエッグマンは地面に落とされた。

「ああ！ せっかくの最高傑作が！」

エッグマンは嘆いた。

「さてエッグマン、さっきのかりはどう返したらいいのかな？」

「ああ、たっぷり返してやりたいな。」

「?!!!」

エッグマンの後ろにはソニックとナックルズが指の関節を鳴らしつつ立っていた。

「お前ら！ どうやって！」

「俺が出してやっただけだが？」

ストレンジャーが剣を振りながら言った。

「さっきも言ってただろ？」

「あの剣はダイヤモンド以上の強度じゃないとダメだって。」

「しまったー！！」

エッグマンは叫んだ。

「うるさい！」

「黙れ！」

どかどか！！

ソニックとナックルズのアッパーパンチが来た。

「あーれー！！」

エッグマンは空に向かって飛ばされていった。

「まだまだ！」

「追撃！」

どすどす！！

さらにテイルスとストレンジャーの回転キックがエッグマンを襲う。

「ぎゃー！！！！ おぼえてろー！！！！」

エッグマンは窓を破り飛んでいった。

「やったな、テイルス。」

「すごいかっこよかったぜ。」

「そ、そんな事無いよー」

テイルスは照れながら言った。

「ほんとに良かったと思うぜ。 ありがとうな。」

「うん、どういたしまして。」

テイルスとストレンジャーは握手をした。

「さて、悪代官は消えたし、復旧作業をするか。」

ストレンジャーは外へ出つつ言った。

「でも、まだメカが残ってるんだろ？」

「どうすんだ？」

「この剣で切って、焼却してやるさ。」

「じゃあ僕も手伝えるね。」

テイルスは言った。

「俺らはどうすればいい、ストレンジャー？」

ソニックとナックルズは言った。

「じゃあ一回家に戻ってあと二つ、道具を持ってくるか。」

「まだあるの？」

「ああ、スピアとハンマーがな。」

「OK、それで俺らも手伝うぜ。」

「朝まで忙しくなりそうだね。」

「じゃあ、一回外に出ようか。」

ソニック達はエッグマンの作った塔をあとにした。

こうしてエッグマンの計画は無事崩壊しトロピカルアイランドは無事、エッグマンランドにならずにすんだ。

戦いに勝利したテイルスとストレンジャーはソニック達も救出しメカのエリアをもとに戻すべく外に出て行った。

深夜のトロピカルアイランドはメカを壊す音と火の明かりが島に広がっていた。

そして、もとに戻ったころには朝日が出てきてソニック達の寝顔が映し出されたのであった。

— E P I S O D E E N D —

トロピカルアイランドを奪還せよ！

<http://p.booklog.jp/book/88788>

著者：四神 夏菊

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88788>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88788>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ